

光明第七号 大正八年七月

一、意味もない、価値もない人々の交りよりも自分一人、たった独りがよい。自分一人の考えを人に言つて解りそうもないならば、自分一人で考えたらいい。何のこともやら解らない、煩雑の生活より、自分一人の静寂な、自分で自分を味わえる孤独な生活が、ずつとにぎやかだ。

一、女子の方よ、自分を殺している貴女の生活は、貴女等が目覚めることによつて救わなくてはならぬ。女性に対する多くの問題は、女子の覚醒によつて解決しなくてはならぬ。

一、夏は男性的である。弱い者の活動をゆるさない。その強い力は全ての生命を育てあげる。何ものをも焼きつくさなければおかない。

緑！ 緑は男性的な色彩である。脂汗をふるつて、濃緑の中に、強い陽光を受けながら、ジーツと歓喜をくいしめて、雄々しく立つた、自分等は如何に幸福だろう。

巻頭の叫び！

一、自分一人の改善。自分の身体の中でたとえ指一本にでも豆粒程の腫物が出来たら決して指一本の苦しみだけではない。自分全体の苦悩である。眼一つが悪くなつても、眼一つの苦悩であつたり、眼一つの不自由ではない。体全体の苦悩であり、不由である。小さく取れば一家は一個の体である。大きく見れば国家は一個の体である。自分等の形造つている社会も、村落も、皆体である。一本切り取られた指が生きて行かれるものでもなければ、指一本切られた体も平気ではいられない。

自分は全ての体の一部分である。然り！ 体のどこかである。だから自分一人が善いか悪いかと言うことは、体全体が善いか悪いかと言うことに、大なる関係がある。自分一人が善いと言うことは、自分の着いている体（家、村、社会、国家、世界）全体の幸福である。体全体の幸福は即ち、自分の幸福ではあるまいか。すでに自分は体の一部分なら、体の中から逃げる事は出来ない。体にも、自分一人を捨てることは出来ない。自分一人の改善、自分一人の真面目は人生幸福の根本ではあるまいか。

一、「綽々として余裕あり。多忙は強き者、優れたる者に与えられる自己発見の機会であり、自己真価を確知する時である。多忙の征服者が強者であり、幸福者である。多忙と戦つて勝つ者には、常に、綽々として、余裕がある。あたれば払い、突けば切り、電光石火の如く、多忙に勝つ者は、其心中なお綽々として余裕がある。「鍬の柄にも笠」という田植前後の多忙中、果して綽々として、余裕ありや否や。

『継続する事』の力

成るか！成らぬか！の岐路はどこか。

英雄、豪傑、学者、大芸術家、何かに優れている人でもとても初めから優れていたのではない。我らの様な凡人とそれ等のものどどこがちがつていようか。どんな人間にでも同様にすることは発奮であろう。人に馬鹿にされたり、読書して感心したり、色々な機会に出会ったりして、「よし、やってやろう」と強い決心をすることが度々ある。「奮起する機会に出会うことは普通の人間なら無い人はあるまい。ナポレオンが「他日欧州の天地を振り動かす者はコルシカ島民だろう」という預言を読んで発奮したということは誰でも知っていることである。本県が過去に於て出した最も世に知られた頼山陽先生はもう十三歳の時、

十有三春秋 逝者已如水。

天地無始終安 人生有生死

安得類古人 千載列青史

十有三春秋、逝く者はすでに水の如し。天地始終なく、人生生死あり。安んぞ古人に類し千載青史に列するを得ん。

という詩を作つて、どうして歴史に残る様な人になろうと言っている。こんな人の発奮はもちろん凡人のそれとは違っているけれども、凡人には凡人の理想もある。発奮する機会にも出会う。特に我々青年には、感激が多い。理想の世界がある。自分を信ずる力がある。それらのものはあらゆる機会に燃えないではおかない。英雄もそうであつたらう。大宗教家もそうであつたらう。そして、自分等もそれである。凡ての青年がそれなら何故、自分をもつと大きなものに育てることが出来ないのだろうか。出来上げられない者には継続が出来ないからであらう。永續しがしないからであらう。

何にでも優れている人は、目的が出来たら成功するまで続けて行く、五年も十年も一生涯でも続けて行く。それが出来るか出来ないかの岐路である。凡人はいわゆる「感心上手の行い下手」である。新年がきた時には、本年こそはと可なり強い決心は持つがすぐ、何時の間にもやら去年と同じ様な事をやっている。

学校に行つてゐる時でも、今日から本年中、毎日英語の言葉を十づつ覚えようと決心する。ところが最初こそは一日に二十づつでも平気で覚える、一週間もたてば、二十は十に減る、一ヶ月もたてば、だんだん減つて、もうそんなことは止めてしまつてゐる。初めの計算はよかつたのだ。一年に三千六百の言葉を知るはずである。それなのに本年の暮にはそのために知つた言葉はないことになる。今少なくて取つて、一日一語でもこれを確実に永續するならば、一年には三百六十字知つてゐるはずである。二十字と決心して続かないよりは、一文字づつと決心して永續する方が一番よい。

天性賢くて、大事業をし、人生に貢献することの大なるものは、その発奮して決心することも大きいし、永い間継続することも出来る。ニュートンが天体の観測をして

「二物質間の引力は、双方の質量の相乗積に正比例し、その間の距離の二乗に逆比例する」、という万有引力の法則を得る迄には十数年かゝったということである。徳川時代の国学者で有名な本宣長先生は、古事記伝を著すのに、三十五年かかっている。今日のこの文明は皆過去に於ける此ら偉人が一生涯自分の目的に向つて、努力を継続した賜である。古事記を研究するものは古事記伝によらなければならぬ。物理学一頁に万有引力の法則と出すには、ニエートン十数年の研究努力がいったのである。偉人傑士には必ず継続がある。全てを超越して、自己の成さんとする事業に対して突進するには、死をも恐れぬ真面目がある。我々は学者ではないかも知れん。金持ではないかも知れん。大研究は出来ないかも知らない。大事業が出来ないかも知れない。学問が生命ではない。金があれば万能でもない。大事業、大研究、必ずしも感心したり羨むには足りない。我々は唯何も考えないで、生命を捧げたら好い。

我々の中には、二人三人の子供の親として、親族訪問さえも出来かねる程仕事におわれている母もいるだろう。米を作る人もあろう。工場の人も、家を作る人も、兵士も、全て、為さねばならぬ何事かを持たない者はあるまい。我々は我らの為さねばならぬことが、如何なることであるかを嘆く前に、小さな自分を棄ててしまわなければならぬ。たとえ、自分の一人子を育てあげることでもいい。一生涯風呂たきでもいい。自分の愛によつて生命を培ふ仕事でもいい、何でもいい、もつと全てを棄てた、その上に自分を見出して、その事のために、生命を捧げねばならぬ。

いくら我々が凡人でも、英雄偉人にまけないで出来ることは、自分を棄てることである。智慧も才質もとても追い付けなくても、出来ることは、自分を棄てることである。自分の精神生命を捧げた者は、即ち小さい自分を棄てて、大きな自分を見出したのである。凡人の強みはここにある。自分の弱きを知つて、強くなれたのである。何物よりも強い、恐ろしい者は、自分を棄てたもの、生命を捧げた者である。我々の生すべき最初はここである。我々が生命を捧げたならば、そして楽しむならば、それは即ち道念に生きる信仰の生活であり、力の生活であり、感謝の生活である。僕が言うところの継続する事の力とはそれである。僕らはいやいやながら、つまらない「あきらめ」に暮して、自分の底からの力をすてて生きようというのではない。自分が育つべく見出した場所で自分をすて、自分を捧げて、継続するの力を得たい。

兄はこんなになのみます

兄弟姉妹よ

光明団員は兄弟姉妹であることは、この上もない嬉しいことです。我々は、光明団員にならない先から兄弟姉妹であったのです。宇宙万物皆同胞です。新しく同胞であることを知ったのです。万物すべて、絶対より出でて絶対に帰らなければならぬ。我々の体は宇宙の一部である、我々の靈魂は、宇宙の意志によつて表われ、絶対の使

命の一部を果たすべく、生れ出でたるものである。であるから、一個一個の形態は即ち異つていても本質の差ではなくて、形の差である。同一宇宙から生れたが故に同胞である。我々は同胞である。それを知ったのである。

『兄弟鬩干牆』

お隣の支那を見なさい、北と南に分れて、争っているではありませんか。長い間争つて、兄弟喧嘩をして、外国からは馬鹿にされているではありませんか。争つてもいい、自由のために、平和のために、真に、自分をすて争うのなら争つても好い。自分のためにせんとして戦いをおこしてはならぬ。争う者は弱い、団結する者は強い。光明団の兄弟よ、団員は親しかるべき兄弟ではないか。男子は結束して青年中に於ける善的勢力の中心となれ。女子は団結して、世の目覚めざる女子の夢をさましてやろう。それなのに団員中の者どもが、小さい感情の働きで争うとは何でしょう。女子の方の手紙に、そんな様子が見えるのが悲しい。我々兄弟姉妹が困っているなら救つてやりましょう。悲しんでいるなら慰めてやりましょう。悪いなら真心で悪いと忠告してやりましょう。水臭い心をもちますまい、温い空気の中で人を温く生かしてあげましょう。兄の心をくんで下さい。

愛に飢えたる人々よ

人生を冷き理知の世界と見るならば、その人の住む世界は、蟬をかむ様な味気なさと、法律書を読む様な冷さしかないでしょう。人生は、黄金さえあればよい人間には、常に、飽きたらない自分を飾りたてるためにする悲哀のかけがえつきまとうでしょう。そして又何時か自分独りの寂しい墓場の様なところに立つていることに気付く時があるでしょう。たゞしかし、愛に飢え愛を求めて苦しむ者、愛によって人にむかい、愛のためにつとむる者には温い清い世界があるでしょう。求むる者にはあたられるでしょう。飢えたるものは得ることが出来るでしょう。

人生は愛を求むる者によって神聖化され美化せられます。我々は愛によって生きんとする団体ではありませんか。飢えたる愛を得ようという人の集りではありませんか。私は皆様の愛に生きています。私らはお互の愛の高潮し来るにつれて、力をまします。「光明」は、その愛の全体の表現です。新しい思想の研究者や、現代文明の批判家などは、博士や学者の説を研究して下さい。思想の書物をたんと読んで下さい。私らは私らの職業に、私らのもつ芸術に、愛を注ぎましょう。

日誌の中から

六月一日 日曜 晴天

花の園の中だろうか。花の園をさまよっているのだろうか。否、夢だった。黄色の新しい蚊帳の中に、昨日乾かした寝具の中に包まれて、静かな温い眠りからさめたのだ。一日の誕生と、心の中がゾクゾクと浮きたつ、もう日が出ている。喜びの血潮が体中を音高く流れる。歯ブラシをくはえて、庭の周りの草木を一度見て廻つて、苗代に出て見ると、稲の葉には、太陽の力と徳とを讃嘆する様に、玉が幾十と光つて

いる。室に締ると、奇麗に掃除されて、清い涼しい風が南の窓から他の方に流れている。清い心でその流れの中にひたつて机にもたれると、何の要求もなかった。何の恨もなかった。食事をすませて、読書の人となる。「新なる生命を基礎として、凡ての價値の再評定」という昨夜の続きを見ると「人類は価値の所在を求めて、彷徨し来ると既に数千年、真理はザイスの神像の如く深く、神秘の扉の裏に自ら隠れているのではないが、人類は自らその眼を閉じて、真理を見ることの出来ぬを嘆き、自らその手を縛して、之を捕うること不可能なりともがいている有様である」と書いてある。小さい自我に生き、小さい主観に囚われている我々の生活の記述ではあるまいか。

十時がなつたのに驚いて、書物を閉じて、例の雨傘代用の麦わら帽子をかぶつて、苗代に出た。暑い太陽に照されて、稲は強く育っている。取つても取つても草がわへ虫がつく。作物は人間よりも「誠」の心を多くもっている。愛を注がれると、それだけの礼を無言の言葉で言い表す。三十分ばかりして、掘岡君が牛を使っている、ここに行つた。そして、「中造る」という田の鋤き方を習つて牛綱を取つた。水田の中に奇麗に土の山が出来ているのに、僕がやれば、それが切れ切れになつて、まがる。「鋤を見ないで牛の鼻を見て」と注意されても、実際にはむずかしい。それにしても牛の正直なことよ。使い手の心が静かな時は、牛も静かだ。あわてれば牛も騒ぐ。牛は人の心の鏡である。

かえつて足を洗っていると、郵便配達がどつさり郵便物を渡して行く、その中をくつて見ると、手紙が四、五通ある。菖蒲の花の咲いている地に足をつけて、手紙の封を切る。兄弟から来る有難い通信ばかり、「兄様から来る御手紙と父母から来る手紙以外には私には楽しみも慰安もありませんもの」と書いてあるのもあれば、「先生よ、先生よ、僕は先生と生は異にすれども死は共にする決心です。」こんな言つて下さる弟もあれば、「先生よ、先生の御手紙で夢の中にいることが知れました、先生の熱愛が、骨をも身をも貫いて、心のどん底がビンビン鳴りました。」と言つてもあつた。

何かしたいと思うので課外掲示をはじめた。瞑虫の話を一枚書いて、あと一枚の掲示板は夕方にするにすることにする。唱歌室に入つてオルガンを弾きはじめると、佐々木が来た。文江さんが来た。算術を四題教わつて、「先生、ねぎはお嫌い、お好きだったら、小使いさんをよこして下さい。」と言つて帰つて行く。後は又静かな一人の世界である。腹が減らないから忘れていれども二時、小使いを自家へかえたので、自分で茶をわかつて食事をする。ハンカチや白いものが水につかつて臭くなつていたので洗いはじめる。やはりさつききの牛使いの通りで石鹸を多く使つてきれいにならないのがおかしかった。

外に出て「エゾ菊」の苗床の草を取る。秋になつたら、この三四分しかない草から、太陽の慈と地の恵によつて、僕の努力によつて、赤い紫な白い花が咲くと思えば、何だか神秘的な気分が一ぱいになる。職員室に入つて、成績品を見る。六時半になつた。もう太陽も落ちかけたから運動場に出て、出席歩合を表にして書いておく。佐々木先生がかえつて来られる、急ににぎやかな気がする、勝川の風呂を頂いて一日はおわる。夜は「農業道徳」を見る。星は光っている、多くの兄弟の幸を祈つてねる。

□この月は、農業がいそがしいから出来まいと思っていましたのに、昨夜と今晚（十二日）佐々木先生と岩田先生、堀岡君、堀川君、辰本署等が疲れているのもいとわず手伝って下さったので、急に造りました。紙も不揃いになりましたがゆるして下さい。岩田先生は、もう二晩とまりがけで手伝って下さるし、堀岡、堀川両君は田植に出て、眠いのに刷って下さる、どうか、これらのお方の献身的な御骨折りに感謝して下さい。本月もお別れ致します。さよなら。